

(抄 訳)

DFID とその他英国政府関係者は、PRSP の発展に重要な役割を果たしてきた。DFID の国レベルでの PRSP への取り組みはきわめて熱心で、DFID アフリカ局政策課は DFID が PRSP にどのように取り組むかというアイデアを初期の段階から用意していた。

PRSP プロセスが過去 4 年間で進歩したことに伴い、DFID のアプローチも事務所レベル、本部レベルの両方で進化した。初期の段階では、事務所間での情報交換が必要であったため、DFID の委託を受けて ODI が中心となって、PRSP モニタリング統合プロジェクトを 3 年間にわたって実施した。しかし、今では特にアフリカの DFID 事務所は PRSP に精通しているため、一般的な事項に関する情報交換の必要はなくなった。

DFID 本部政策局も 2003 年春に調査と政策、実施との関係を緊密化する観点から組織再編が行われ、その結果、教育や保健などの単一セクター割の部署を廃止し、24 の分野横断的なチームが幅広い援助テーマを扱うようになった。その中には、貧困層にやさしい成長や援助効果などを扱うチームがあることから分かるように、PRS アプローチが他のイシューより重視されている。

特に今年からは、PRS チームが発足し、DFID 内部の PRS に対する政策論議を調整している。現在同チームは、DFID の PRS に関する統一の見解とも言える新しい政策ペーパーを作成しており、このペーパーは、「アフリカ委員会」や来年イギリスが議長国となる G8 サミットや EU、そして国連ミレニアム目標中間見直し会議にも提起される予定だ。

この新政策ペーパーの土台となるのは、2003 年に DFID の 30 の事務所で実施した調査で、DFID 在外事務所が得た教訓や実例を分析するものである。もちろん PRS の進捗状況は国によってまちまちであるが、ある程度は一般化することができ、またベスト・プラクティスを示すことも可能である。

アフリカの多くの国では PRS プロセスがよく定着しており、これらの国では、DFID は、持てる援助手段をこのアプローチに合わせているが、一方アジアでは、PRS プロセスがまだ十分に定着していないので DFID の直接支援にも限界があるし、また政府自体の能力も比較的高いので援助もアフリカ程必要としないかもしれない。しかし、DFID は、PRS の原則は、全ての国に当てはまると考えており、アジアでも既存の政策と政府の能力にのっとった形で PRS アプローチを推進している。たとえば、国家レベルでの能力がすでに高いアジアの国では、セクターレベルや地方レベルでの PRS アプローチがよい例として注目されつつある。

DFID は、それぞれの援助国においてその国の PRS への対応能力を育成する観点から、PRS に対する国家的オーナーシップを持たせること、公共財政管理の改革を進めて PRS と予算との関連を強めること、モニタリングと評価の能力を高めることの 3 つを重要な要素としている。これに並行して、DFID では、幅広い社会に対して、PRS プロセスへの参加という役割から国内における長期的アカウンタビリティの

機能という役割へ移行させるべく支援している。多くの国が、PRS 文書の作成から実施に移行する中で、DFID の支援は、これまでの PRS 文書作成のための技術支援から PRS 実施に必要な公共財政管理に移っている。また、PRS の進捗に伴い DFID はドナー協調や調和化に関する活動を活発化させている。

PRS は、今や DFID の援助活動の心臓部になっているが、このプロセスに援助を最大限に調和させ、支援することは単純なことではない。DFID の国別援助計画を PRS に密接に関連づけるだけでは十分でない。PRS の実施段階になると、国の実情を深く理解することが重要ということが分かってきた。今 DFID の在外事務所は、PRS の成功のためにいかに政治を変えるか、そして、いつどのようにして新しい援助モダリティである直接財政支援を導入して PRS 支援を最大化させるかという二つの課題に直面している。

これらの課題の解決は単純ではなく、他の二国間ドナー、多国間ドナー、NGO、そして相手国政府との密接な連携と注意深い分析が必要である。ドナー間の対話、調整、調和化も PRS を支援するための重要な要素である。

以上